

斎藤緑雨の談話「帝室と文學」

——『斎藤緑雨全集』補遺——

池田一彦

以下に掲げるのは、『中央公論』第拾五年第七号（明治三十三年七月二十五日発行）に掲載された、斎藤緑雨の談話（筆記）「帝室と文學」である。本来、筑摩書房の『斎藤緑雨全集 卷二』に収録されるべき筈のところ、編集者の一人であった筆者の不明により、今日まで逸した儘となつてしまった。ここに機会を得て、補遺として載せることにする。

（平成十三年十二月一日 誌す）

帝室と文學

齋藤 綠 雨氏談話
時 文 記 者 筆 記

こは記者が綠雨氏を其病床に訪ふて、特に聞き得たる談話の要領なり。近刊の『新小説』に出でたる同氏の文壇保護説と關聯する所尠なからず、併せ讀みたらば殊によかるべし。

文壇の保證とか、待遇とかいふ事について、近來種々の説が出るが、畢竟それも不振の爲めで、不振の原因を説きつくした揚句が、さうなつたんだらうと思ふ。私も提出者の一人だが、保護とか待遇とかいふと、直ちに金錢の意味、生活の意味に解してゐる者が多い。私は報酬の事に就て、別に論ずるつもりで居るが、今度の『新小説』に出でゐる保護奨勵策を讀んで、矢張左様いふ意味からの誤解も出やうし、元來保護を受けるものか、受けないものかの議論も出やうと思つて居る。私のは重に今の時勢と云ふ上から立言したので、文士といふ事が無論自分といふ事ではない。文學に限らず、凡ての物の状態から見、西洋の例だの理屈だので、今の時勢を律しやうとするのは無理ぢやないか。保護といふ事を言出した上は、最早社會の實際問題

に一步這入つてゐるわけで、現在の文學及將來の文學に對して、効果のあると認められる丈の、保護策なり奨勵法なりがあつたら、それを行ふやうに力めてもいい、ではないか、まさか文壇に居る人は間違へもしまいけれど、文壇以外の人は、私が今保護奨勵案を出したからと云つて、現在の文士が寝て食ふ爲めに出したのではないことは、能く承知してゐてもらゐたい。『新小説』の談話の中にも斷つて置いたが、無論私のは方便だ。方便でも夫が將來の功益になつて、文學發達の道行に力を與へることなら、かまはないと思ふ。私の出した策は金がなくてできる策でないけれど、帝室から御手當を貰ふといふのが目的でなくつて、競争製作をさせやうといふのが目的だから、事情が今直ぐに許さない迄もどうか、さうなればいゝといふ事を私は眞面目に思つてゐるのだ。

元來私が帝室といふ事を考へたのは、保護說中に述べた理由の外に、すべて帝室に於て遊ばされることは、常に一國の模範となり、儀表となり、本源となつてゐるからで、或論者は社會の尊敬心といふ事をいふが、今の社會は文學といふものゝ趣味を能く理解しないのだから、假令文士が身命をかけて何か試みたところで趣味を解さない社會に尊敬される筈がない。たまく解する人があつても、夫は無勢力、無資力の人で、厚遇したくとも厚遇の出來ない人達だ。さういふ人達を相手の社會なのだから、先づ帝室にお願申して、模範を示して戴くより外はない。社會は必ずそれに啓發せらるゝだらうと信ずる。私の建てた競争作案若くは之に似たやうな方案が、今直ぐに行はれないまでも、文學といふものに對して、從來よりはもつと進んだお考へを、帝室に於て持たせられてもお宜しいやうに私は思つてゐる。現在帝室の文學といへば、和歌より外には何もあらせられぬ御様子で、鬚の白い、皺の多い、頭の外側そとがはよりは内側の奇麗うつくしんに禿げた有徳人を召させら

れて、御歌所といふものが設けさせられてあるばかりだ。急激な論者は、御歌所廢止を唱へてゐるさうだが、是は全く御廢止なさらずとも、漸次に御擴張遊ばして、帝室は帝室の文學寮といふやうなものを置かせられたらよからうと思ふ。此處に私が文學といふものは、無論小説に限つた事ではない、歌もよからう、新躰詩もよからう、凡て廣い意義の文學寮といふものに遊ばされたい。時と金とがなければ、手の着けられないものがまだいくらかもある。日本の文學が上に衰へて、下に昌へたといふは誰でも知つた事で、早い例が源氏物語はどこで作られたものであらう、何處で珍重されたのだらう、紫式部が博文館へ賣つた原稿では決してなかつた。要するに、私は文學の保護といふ事を除けて考へても、一日も早く、帝室に文學寮といふやうなものを置かせられて、然るべきものだと思ふ。あまり立入るのも畏れ多い事だから、帝室のことは此處で措いて、さて今の上流社會と稱する者の事も少し言はう。今の上流社會といつたら、實に驚き入つたもので、朝野ひつくるめて、文學趣味などは絶無とも言ふべき有様だ。勿論文壇に籍を置くものゝ中にも、自分は何をしてゐるのか、自分で知らない人さへある位だから、他界の人をさう責めるのは無理かも知れないが、昨今のやうに頻りに他界から口を入れるやうになつては、一應言ふだけの事は言はねばならない。先づ當り前なら、此上流といふのが、智慧もあつて、お錢あしもあつて、文學の發達といふやうなことに直接でなくとも幾分の便りになる筈のだが、それがまるで、文學はおろか、只の文字さへわからないのだから、文士の尊敬などゝ云ふ事は、此連中に對しては、夢物語のやうなものだ、だから、夫を望むといふよりは、教へてやるといふやうにでもしなければ仕様がな。今の顯官とか、紳商とかいふやうな人で、文學を解する人はと云つたら、誰と答へることは出来ないぢやないか、僅に一二あつて、鳥渡いへば末松さんとか、西園寺さんとか

いふやうな方々もあるが、それとても文壇自身に進んで来た今から見ると、どうも趣味の點が違つて居るやうに思はれる。其餘の成上り紳士達に至つては、講談の筆記位のみしか解する力がない、其中でちよつと立勝つたといふのが、江戸時代の草双紙を知つて居る位のことだ、だから、文學と云へば、詩か歌位に心得てゐて、七言絶句の一つも作れば、あれは學者だねといふが、併しそれも尊敬するのではなくて、遠ざける前置ともいふべしだ。文學は未技だなど、いふ語があるので、何處迄もそんなものだと思つて居るが多い。當世政治家流の人々は、皆其仲間だ。今の小説の舞臺が狭いとか、小さいとか、理屈らしいことを云ふから、能く／＼聞いて見るとそれは小説の中に志士の居ない位ゐるが議論の落だ。戀愛ばかりが小説だとはいはないが、小説は東洋の安危とか、列國の意向とか、そんな事ばかり列てできるのではない。得て政治家流の人々は、露國がどうの、英國がどうのと、地球儀を手玉に取るやうなことを應接所で言ひつけて居る癖があるから、さういふことでなければ、大きいとも、廣いとも、思はないらしい。小説家だつて世界の形勢とか、政治上の革新とかを知らないのぢやないけれど、是をたゞ陳列した丈では、小説にはならないのだから仕方がない。斯の如き誤解者の偽りの抱負を代辯するのが、小説家ではない。もつと文學に對してシンミリした考を持つて居てくれねば、文士の立ち場といふものが今の時世では無い譯だ。それでもう一面、上流社會には別の誤解がある。それは幾度もいつたことだが、今でも小説といふものを、草双紙か、人情本同様と思つて居ることだ。江戸時代の作者は、多く幫間のやうなもので、大家の檀那を取り巻くとか、金持の隱居について歩くとかいふやうな事をして、其間に御機嫌とり半分一本でも作つて、自分で幫間たることを甘んじて居た。其お蔭で、今でも小説といへば草双紙、小説家といへば幫間、それを讀んだり、披げたりすると、何だか賤しい

やうに思つて居る人があつて、これが存外今の文壇に障礙を與へて居る。先日來文士の交際について辯ずる人があるが、文士だつて交際を好かないのではない、交際の必要を知つては居るが、一方へ行けばまるで理解しないし、一方へ行けば幫間のやうに心得られるし、其中を不承して交際するといふことは、一時は出来るやうが、長く出来ることではない。そこで、自然世の中を離れるやうな形になり、世の中は愈々作家に離れるやうな形になる。私の考では、其罪は社會にあるか、文士にあるかといふと、身負か知らぬが、社會の方に多くあるやうに思ふ。今の作家は、作家自身としては修養もせねばならないし、生活もせねばならないし、生嚙りの奴からは、注文的評論に會はなければならぬし、而してまるで解らぬ奴に對しては、誘導し寧ろ開拓せねばならない。随分つまらない位地に居るものだ。併し幸に保護論とか優遇論とかいふことが、世間に聞え初めたから、此機を外さず、文壇の内と外とに向つて、大に力めなければならぬと思ふ。こゝ二三年文壇沈滞の理由の中には、日清戦争の影響といふことが大分あつた。戦後の膨脹とか云つて、錢勘定は大分やかましくなつたが、文學の詮議などはまるで棄てられた。それは戦に勝つたのだから、此勢ひで小説を讀まうといふよりは、まあ一杯といつた方が尤もだつたのだらう。今又丁度清國に捫着ができて、此影響が再び文壇に來るかも知れないが、それは今からの文士の覺悟次第で、どうにでもならうから、私が『小説』に云つたやうに、大同團結でないまでも、大に文學の勢を張らねばならない。